



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代日本農民家族における後継者の教育
Author(s)	チャイソングラム, ソンペット
Description	博士論文要旨
Citation	北海道大學教育學部紀要, 62, 213-223
Issue Date	1994-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29422
Type	departmental bulletin paper
File Information	62_P213-223.pdf



現代日本農民家族における後継者の教育（博士論文要旨）

チャイソングラム・ソンペット

（1）問題意識

農業後継者の教育過程は主に二つの側面によって展開されている。それは家族内で構成され、農民が暮らしている地域社会の中から与えられた環境によって養成されるのである。家族内で行なっている生業—生活過程、農民の子供の教育、人間成長という過程では、主に親が持っている思想によって展開されることから始まるのである。社会的発展に関して最初の段階では、我々の祖父、及び父の代がつくりあげたものであり、家族の中に発展させられたものである。その次は、家族が生み出した教育の土台の上に、外の社会に出会って、色々な場面を形成して、社会的文化的発展をもたらしたことなのである。

従って、地域に住んでいる農民は自らの力で生業—生活過程を再生産してきていることは事実である。しかし社会が変化しつつある中で彼等は、子供の教育について、どんな方法で、どういう機会を通してそれを繰り返す、様々な問題を発展させるのか。特に、農村社会と農民家族の場合、そういったことの中で彼等の暮らしが変更され、時には変質させられたことはいうまでもない。

日本のように近代化された農村地帯で、家族はどのような形態をもち、そこでどのような新しい価値観が形成されてきたのだろうか。さらに、それはどのような形で農業後継者に受け継がれているのだろうか。こうした教育過程とそこで係っている諸問題を研究することは、近代化した日本農村の将来を考える上でも、また現在「近代化」を進めている東南アジアの農村社会の今後を考える上でも、不可欠な課題である。本論文は、実際に農業を営んでいる農民家族を中心に、「父」と「子」の間に伝えられる考え方とその手段、機関、意味、家族の労働単位や生産過程等に関連する地域社会の開発計画を含めて、その農業後継者の教育過程を把握する。

（2）先行研究

地域社会構造や農民家族の変化については様々な研究がなされてきたが、家族における後継者の教育に関しては数少ないようである。そういった研究分野を三つに分けて調べてみた。それは主に、(1)農村地域の社会構造、(2)農業教育史と、(3)近代化した農業の分野である。

(1) 農村社会構造について、鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』（1940）が指摘した旧い日本の農村社会状態では、いわゆる「自然村」の中で行なわれていた農民の生業—生活過程、その家父長制度を込めていた「イエの精神」と、村の共同体に集中された「ムラの精神」があって、自然村が構成された。それは日本の伝統的な農村社会であり、家族及び部落内の共同体を中心に人々の暮らしが存在したのである。そのような生業—生活の範囲は外の社会との関係が余りない、自給自足のような農村社会であった。ついで、明治維新に入ってから社会構造が変り始めた。しかし、家族内で行なっていた子供の教育形成過程がどういう風に変化してきたか、さらに、現段階のような幅広い範囲で社会的変化が進んでいる状態で、「父」から「子」へ何が伝えられてい

たのかは、加えて説明する必要がある。

安達生恒の「伝統農民の思想と行動」(1962)は、農民の知識、経済的思想の変化は戦前と戦後の段階を比べて余り変らないという。かれは、鈴木栄太郎と同じように、ヨーロッパの近代資本主義を生み出した近代的市民ブルジョアジーのライフ・モチーフを事例として、日本の伝統農民を見たのである。安達によれば、戦前の農民の「勤労」と「節約の精神」は、彼等の偶像であって、「経済合理」の観念、または「計算合理生」を知らなかった。即ち、「小農維持策」は「資本主義小農思想」に他ならないと指摘した。しかし、現在においてある専業農民の姿は、あらゆる手段で自営農業のために、かなり技術改善及び知識革新という傾向に進んでいる。その中で、農民は生産コスト削減、家族労働の改善、生産や品質の向上等、いわゆる合理的生業—生活の観念が媒介していると見ることができる。

(2) 農業教育史については、農政研究会(編、1976)を中心に見た。そこでは、一般農民のために設立した農業教育学は中々見られなかった。しかしながら、そういった社会開発進展が政治的変動と共に、如何に農民の生業—生活に影響を与えたのかを見てきた。例えば、明治維新によって北海道開拓時代が始まってまもなく、道内開発に従事するための農業指導者養成を目的として、札幌農業学校(明治20年)の他に、空知(明治40年)、十勝(大正初期)、永山(大正初期)等、それぞれの地域に農業学校が設立された。

それは、当初の目標が生徒及び父母の意図を無視して、非現実的なものであったといわれた。ある程度は農業のやり方を学ぶ機会でもあったが、多くの場合は生徒の精神的及び身体の「忍耐」を訓練させた面が見られた。また、青年の団結や組織を強化させた中では、その理由が「上」の要求であり、教育に政治や戦争の影響が多かったと言わなければならない。そして、戦後において市町村の段階で設立されたのが「定時制」農業高校であったが、さらに、昭和30年代後半から、「全日制」農業高校も農業自営者養成方針に基づいて、近代的大型農業の方向で教育カリキュラムの改善を行なった。

(3) 地域の農業開発に関しては、近年において農民の生産・生活水準が前より高まってきているが、北大教育学部産業教育計画研究施設報告書(1978)が指摘した農民の生業—生活は、様々な社会的経済的場面等での「ゴールなき拡大」における、農業経営問題を明らかにした。北海道において、特に酪農専業経営では、いわゆる近代化した農業の中から生じた矛盾や問題が次々に起きた。それに対して農民の自らの対策は、政治的な態度という「農民自治体」の形で形成されたと思う。しかし、地域社会から生み出された政治的態度は、道及び国のレベルに対しては、農民が抱えている要求が内面的に変容し、矛盾が起きてしまったという。

何れにしても、現段階の近代化した農業経営を行なっている農民は、様々な矛盾や問題を避けられない状態ある。例えば、家族経営問題に関しては自己資金不足、重労働、家族員の健康問題、生産コスト増問題、後継者不足の悩み等である。即ち、「家」の実績の度合いと共に、自家保有労働力を補完・増大させる大規模化、長期にわたる借金を見越して経営を続けるかどうか、ものを導入するかどうかという判断を個々の「家」に迫るといった事態である。

ところで、鶴見和子は共著『内発的發展論』(1989)の中で、地域開発の進展について「内発的發展の多様な形態」を指摘した。それは、下からの要求や不満をもつ一般農民や自治体が、上からの方針と葛藤して、その対立する関係から始めたものであると説明した。鶴見は中国のある地域開発計画と中央部からの指導方針を合わせた側面からできた発展と、日本の水俣病に関わる解決方法の一つとして地域で出された提案や運動、タイの社会的文化的問題に対して地域起こし

運動を中心とする僧侶、仏教徒、知識人の動きは、それらが下からの内発的發展という観点を持つと指摘した。しかし、それらはそれぞれの地域がかなり異なった背景や社会的構造を持っているにも関わらず、内発的發展そのものは一般市民及び農民が自分たちの生業—生活過程を改善しようという視点から生み出されると考えられる。社会の変化やその進展のなかでは、時に上からの強制がなくても、皆自らの思想で自律的な組織または社会的活動を実行していくと思われる。つまり、一般の人々は自由と自立的な考えを込めて生業—生活過程を組み立てているのである。

(3) 課題の設定

3. 1 なぜ士幌町なのか

今回の調査についての地域設定は、北海道北十勝地区の内陸部で農業地帯である士幌町とした。士幌町を選んだ理由では、次の通りである。

士幌町と周辺地域は日本全国に知られ、「日本一の生産地」と言われる程だが、日本全体の社会変化に連れて、一般の農村地帯のように様々な矛盾や問題が起きている。しかし、士幌では農業人口が減っている事態に関わらず、近年では農業従事者が確保され、人口移動があまり変らない地域である。現在、地域の生産を拡大し、「品質の向上」に向かって生産—加工事業が進んでいる。家族のレベルでは、後継者を確保した他、さらに、後継者の農業教育に関連した場面を考えると、親子の関係や日常生活等が如何に形成されたのかを見るのに有効だと思われる。

3. 2 調査方法と内容

平成3年9月の中旬に予備調査を行い、士幌農業協同組合の役員を訪ねてから、農協が管理している工場の視察をしてきた。ついで、同年11月6日～12日の一週間、実態調査を行なった。士幌農協組合員である37家族の父親35人と後継者37人を対象者に、それぞれの家族を訪ねた。調査方法は調査の質問紙を通して面接調査で行なった。

調査の内容については、調査の質問紙を父親用と後継者用を別々に作った。その60位の項目の中でそれぞれの分野に対して聞いた。例えば父親の調査用紙には、(1)家族の歩み、家族の構造、(2)経営内容の変化、経営に関する諸問題、作業の状態、農協との関係、(3)農業視察や研修等の技術及び知識の面、(4)部落の概要、共同の状態、その変化等、(5)農政関係と将来の見通し等の様々な分野を聞いた。後継者の調査用紙では更に、本人の生活史と教育史のほか、農業経営とその問題点を中心にして調べた。

分析方法に関しては、いわゆる教育社会学の方法で、後継者の教育形成過程に関連した各々の側面を考慮した。つまり、後継者の教育過程を見るときに、地域社会レベルから始め、部落の変化、家族の経済面及び生活面、そして個々人の関わりの分野まで見たのである。

(4) 研究の内容

本研究では士幌農民の社会的文化的開発過程を主に三つの時代に分けて、つまり「祖父の代」「父の代」と「後継者の代」に分けて分析した。

4. 1 祖父の代

士幌及び周辺地域において、その中で行われている教育過程は、地域の歴史や農民の祖先時代に関わった背景を見る必要である。祖父の代、いわゆるパイオニア時代を考えると、図-1

のように、それは貧しい移民の家族の生業—生活範囲の中で、後継者の農業観—生活観が形成されたのである。即ち、当時の農民生活は貧しくて、ものが足りない時代であった。小作農家である親は「手」と「クワ」で開墾作業をしながら、田圃や畑を作っていた。当時農民の考え方は、一生懸命に働けば、ものを取れると意識していた。子供の教育方法は、親は自分の働く姿を見せて「見覚えさせる」「手伝わせる」といった伝統的な方法で行っていた。子供は親と一緒にと農作業を手伝う内に親と接触するという期間が多かった。学校そのものが、殆ど実際に生業—生活をする中ではあまりにも遠かったのであった。農民の暮らしにとっては、自然の厳しい状況や過労に対して、人間の力をどれだけそれに入れていたのかに係っていたのである。つまり、農作業の面では「勤勉」または「忍耐・我慢」をかけて、生活面では「節約」し切り詰めていたという、伝統的な考え方を持っていた。さらに、当時の土幌村には、農民の組織がなかった。祖父が父に期待したことは先ず、(1)財産を守って、(2)家族員、または隣の農家と仲良くして、農業を続けるという期待である。

4. 2 父の代

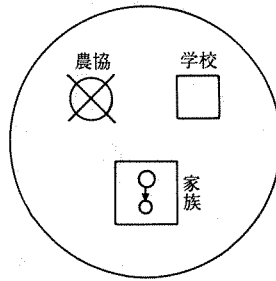
4. 2. 1 地域の変化

先ず当時の出来事を見てみよう。父の代に入って、その生活は、戦争の前後に行われていた農民の暮らしであった。社会の全体的変化に伴って、特に経済面でみれば、既に厳しい生業—生活環境にあった農民は、地域内で商売する雑穀商人との負債や農産物の取引問題に対して、それを解決する必要があった。そのために祖父や父親達は「土幌村農業会」を創り始めた。それは戦後、父親達によって「土幌農業協同組合」と改められた。そして、昭和30年代後半以降の経済成長期に入ってから、それがもたらした様々な農業転換期である土地規模の拡大、労働力不足、機械の導入、後継者の問題、離農ブーム等、農民の生業—生活が様々に大変な影響を受けていった。そのような地域の経済開発事業に伴って、農民の農業協同組合は、その運営と指針を拡大した。いわゆる澱粉工場を設立したのを切っ掛けに地域の生産を増大して、「生産—加工—販売」のルートを進めて経済的改善を成功し、地域の貧しさを克服してきた。

4. 2. 2 家族の困難、経営転換

一方、家族内では経営内容の変化に伴って、父親は土幌農協から色々な農業指導や資金援助を導入した。そして、借金を背負っていた父親たちは新たな経営を試みて、重労働で働きながら機械の取り扱いや技術面、経営面などについて苦労していた。ちょうどその頃に、後継者が生まれたのである。

後継者の農業教育面について、上にいった伝統的なやり方の他に、殆ど皆中学校頃には機械を使った作業を手伝った経験があって、農業そのものが家族の職業であり、自分の将来にも関わると、興味や意識を形成するようになった。彼等の高校教育への進学に当たっては、殆ど「自分で」決めたと68%が示した。つまり、この段階になって、父親が後継者に期待することは「安定できる」家族の農業経営に集中することである。それは父親自身により機械の設備、農業経営の設計、機械の取り扱い等の近代技術と経営面を身につけることなのである。その意味で、実際に行なっている農業経営の中で父は、後継者、及び後継者夫婦と共に経営計画を立てた時、その判断、決定に関する場面が「父」中心ではなく、家族の「話し合い」で行われるようになった。



図－１ 祖父の代

4. 2. 3 士幌農業高校

昭和25年に設立した定時制である士幌農業高校は、昭和30年代には農業転換期の影響で生徒数が急に減って、学校の存廃の問題に迫られた。しかし、地域農業開発のためにその役割をもっと果たすために、士幌農民、町の役員、農協の役員の皆は、その重要性を理解した上で、学校の振興会を立した。それから、昭和40年代まで毎学年の生徒数を確保できた。さらに、本校は北十勝地域の中心的農業教育機関として、昭和49年に「特別農業専攻科」を開設した。それで農業後継者及び一般農民は、日常的農業経営のために必要である技術、知識、経験を向上させ、社会人入学することができるようになった。そのカリキュラムをみると、「畑作経営コース」「酪農経営コース」と「生活科学コース」の三つの部門にわけて行なわれた。後継者の殆どは高卒後、農業経営を推進しながら二年間で勉強する事ができた。後継者は学校の様々な実習事業やホーム・プロジェクトに取り組んだことで、新たな農業教育を獲得するようになったといえる。この段階で農民は、生業—生活を改善する経営というものは、自家の労働単位を集中してひたむき「働く」ということだけではなく、自分たちの知識や経験を「革新」しなければならないと意識した。

4. 2. 4 地域の文化的活動

加えて、地域内の青年の集団について、士幌でもこの時期から盛んになった。つまり、高校振興会を切っ掛けに、同窓会及び士幌青年団等では、社会福祉、環境改善運動、地域の祭り、または農業研修会、機械修理の講座といった様な社会的文化的活動を展開し、その中で、後継者の社会的視野と経験を高めていくような役割を果たしてきた。特に、農協青年部の場合は、農業後継者を養成する目的で、色々な農業経営や技術向上を獲得するために、視察や研修会を様々に維持させている。若手農家は高卒後、青年団を経て、農協青年部に入ったあと、本格的な作業や家族農業経営を親から自分に任せられるようになる。このようなルートで、士幌農家は地域内のあらゆる手段を通して、地域の担い手である後継者にこのような生業—生活について、また農業観、生活観を少しずつ形成させた。

図－2のように、後継者の農業教育過程を考えると、家族の困難を乗り越えてきた父親の経営能力と、地域の農協の役割から与えられた影響、その両者との関係が生じてきた。そして、家族で行なった教育過程が、如何に地域にある農校と農協に関連していたのかを見ることが出来る。さらに、後継者自身では、学校から得た技術や知識の他に、上のように地域にある青年団、及び青年部の諸活動で獲得した社会的文化的知識や経験を、家族の農業経営に直接使用できるようになった。ある意味で、祖父及び父親が守り続けてきた「農業」と地域の「誇り」が身につく

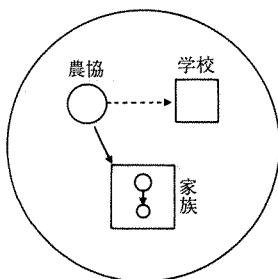


図-2 父の代

ことになったと思われる。

4. 3 後継者の代

4. 3. 1 地域開発について

昭和50年代から段々と農民家族の代替りが行なわれて、後継者の代に入ったのである。そういつた中で、地域社会の変化と家族の生業—生活の転換が起こりつつある。つまり、社会の全体的変化につれ、農村社会の変化が進んでいる一方、農協が変わって、専業農家の家族も段々と変った。主に、家族の生業—生活を支えた土台と思うものは、殆ど家族の重労働と後継者自身が待っている経営技術と農業事情に対する、その判断と決定に関わるものである。

何れにしても後継者の代に入ってから、社会的変化や農業事情の変動がもっと激しくなった。例えば(1). 農協の指針と運営が変わった。

父の代に設立した「農民的」農協の姿である士幌農協は、少しづつ「企業的」農協に変わっていった。即ち、地域の「生産—加工—販売」の方針では、合理化澱粉工場から始め、ポテト・チップ工場や孫会社のKK北海道フード、またはパイテックの研究設備の拡大等、士幌農協の事業拡大が進んでいる。そのために、巨大の金額を投資している事業が展開している。その運営と方針は、他会社や国際的農業競争という枠に入ってしまった。そういった方向に進んでいる農協により、段々と個人の経営者は様々面で強制され、一般農民の生業—生活を取り残すこと意味した。それに対して農民は不安を感じている。

さらに、(2). 離農士幌の場合離農現象はこの頃で三回目であった。その最初は戦前の地域の農業転換期であった時と、昭和38年～42年に起った連続的冷害・凶作の影響の時であった。今度の離農の原因は、後継者の問題より高い生産コスト、増大した負債、値段の不確定さや農業事情の変化に追い付かないという経営問題等である。

4. 3. 2 家族の生業—生活の変化

1) 経営主の姿

上のような状況にし家族の中では、農繁期のように家族の労働単位で一生懸命に働くという現象はまだつづく。そのために、経営主であるような立場になった後継者は、もっと知識革新の努力を進めなければならない。即ち、生産の増大とコストの削減をするために、農業高校や農業特別専攻科から得た経験等を、家族経営の計画に利用できるように頑張っている。例えば、後継者は機械修理、土壌分析、肥料の設計などを実践しながら、農協や他の経営者集団と交流をしている。その中で、部落内の農事研究会、機械利用グループ、同好会等、後継者の小さな集団をいく

つか形成した。経営者に必要な技術や農業情報を獲得することが彼等の最大の目的である。後継者は父の代より、国内外の視察、研修、または実習する機会が多くなった。現在から将来にかけての農業経営に関する分野に、外部からの色々な情報や関心を家族に持ち込んだのである。

2) 政治の関心

士幌の専業農家は、政治についての意見を出しているという程度から、それに対して自分達は「何をするべきか」にまで、色々対応策を議論している。例えば、国の方針、自由化問題に対しては、殆ど皆「反対」している。それと同じように、「単位農協—ホクレン—全農」と三段的な農協のネット・ワークに対して、皆それは「いらない」「必要でない」と批判している。また、地域内の農政に関連した士幌農協の現在の方針についても、そのような「企業的農協」の運営、いわゆる組合員家族の生業—生活問題を早めに解決しない限り、農協の色々な事業拡大に対して、余りにも不満がつのっていくようである。そういった態度について、農協の方針を「改善してほしい」と強く批判しながら、家族内の経営では機械の個人化、土地基盤の改良、品質向上を中心にして経営競争を向かえようとしている。しかし、農政に関心を持っているような父親は、農民同盟についてはあまり意見がないが、これからの農業事情の変化に対応できるような強い経営力を持つように、後継者に期待をかけている。

3) 新たな生活観

生活の面をみると、現在の家族は以前よりその暮らし向きが変化している。そのことは、家事分担や男女の関係の面をみてよく見えたのである。即ち、核家族のようである専業農家の家族では、後継者夫婦が労働に関わる一方、その家事分担を父と母に手伝ってもらったこともある。従って、仕事の内容に関しては、「嫁」の方がただ「家事育児」といった伝統的な家事分担ではなく、家族農業経営についてかなり重要なパートナーとなったのである。

他方では、かつてはなかった家族の楽しみの面でも、現在では農家の生業—生活に欠かせない分野であると皆意識している。つまり、農繁期以外では、旅行、娯楽、趣味などの家族全員での、または個人的な希望が現われている。自分たちは、「何のために一生懸命働くのか」というような疑問を生業—生活の「質」に関して問いかけ始めている。

4. 3. 3 家内における孫の教育

現段階では農民の「孫」はまだ小さいので、ケースNo 1, 4, 5, 6の以外は殆どで小学校に上がる頃の年齢である。何れにしても、家内で行なった教育過程でいうと、後継者は、自分の子供に色々な方法で農業観、生活観を伝えていられると思われる。後継者は農業そのものに関して、子供にあまり「強制しない」ように、自然のように個性を見いだしていこうとしている。教育そのものに対して殆どの後継者は、個々人が持っている意識、興味、要求によって果たすものであると考えている。つまり、本人の能力、興味や決心に任せて、未来の事情変化に「対応できるように」と期待している。さらに、ケースNo 1, 4, 5, 6のように、後継者が自分の子供の教育費に関しては大変だと思いが、高卒後に本人の希望で、大学までも援助してやるという。その期待しているのは、機械管理や経営技術の他に、農業に関する最先端な分野である。

こうした背景で、父親から受けた教育と、地域が役割を果たしていることとで、後継者の教育過程が形成されるのを見てきた。後継者の代に入ってから図-3のように、家族内で行なってい

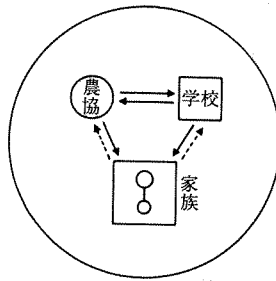


図-3 後継者の代

る教育過程はあらゆる機関と関連している。つまり、前より家族と農業高校との関係が深まっていると同時に、農協及び地域が教育機関としての役割を果たしている。逆に、家族から農協や地域の各分野に対して、農民の **FEED-BACK** が生じてくる。さらに、家族の生業—生活過程は「外」からの情報、援助、または影響等、広い社会構造にまで広がっている。その意味では、将来について農民の暮らし向きは様々な側面と関連して、そういった転換がもっと複雑になっていく。農民自身では地域社会の変化に伴って、自分たちの「生活改善」と「教育革新」をまた続けていかなるを得ないのである。

士幌の場合は上にいったように、将来についての彼等の孫の教育過程は、士幌地域及びその周辺に限定された限りではない。むしろ、地域社会の外にまで農業教育の諸活動が広まっていると考えられる。それで地域社会の中よりも、外部から導入してくる部門が多くなる。例えば国際的な教育ネットワークや経営協力機関が予想されるのである。また、農協の代わりに若手農家は、経営パートナーを見つけていくなら、段々と現在のような「家族—学校—農協」との結びつきが無くなるかも知れない。何れにしても、士幌のような農民は、家族の単位で自営農業を行なっている内に、個人化的経営の方向がもっと強くなる。一方で外に出て勉強する子供は、親より農業技術や最先端の知識を得て、帰郷する U ターンの状態も考えられる (図-4 参照)。

以上のような農業教育のプロセスは「家族」から初まって、「地域社会」が創ってきた教育機関や、農業高等「学校」を通して、後継者は農業観及び生活観を少しずつ身に付けてきたのである。農業は自分の職業であり、家族の生業—生活に関わる将来のことであると意識した時、ある程度自分自身はどう「生活改善」や「知識革新」を進めればよいのか、と様々な方法で計画を成り立たせるようになるのである。

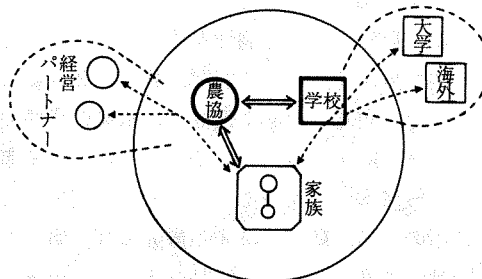


図-4 孫の代

(5) 総 括

本研究では、十勝士幌町の地域社会変化との関係で「後継者の教育」を事例としてみてきた。地域社会の開発過程で、農民の家族における後継者の教育が、地域の社会的、経済的变化によって形成されたことが重要である。それで、家族及び部落の中で行なっている個々人の農業教育過程に関連した側面を分析してきたのである。それを改めていうと下記の通りである。

5. 1 地域の社会的、経済的構造の変化

地域社会の開発過程は様々角度で展開されてきたが、士幌の場合は農民自らが家族の生業—生活過程を展開してきたことがその特徴である。つまり、社会の変化に伴って、農業経営内容や農業の在り方がある程度変化せざるを得ない場面もあった。同時に、家族の将来を考える時、「親」として「子供」に伝える農業教育及び彼等の生業観、生活観は、代々に様々な影響を受けて変ってきたのである。祖父の代では貧しい「小作人」の姿で、父親は「近代」化した農家の姿になって、つづいて現段階において専業農家の「経営主」のような姿に変わったのが、後継者の代である。

即ち、士幌農民自らが自律的な組織を創立してから、農村地域の生産や生活改善に取り組んで、様々な問題や転換期を乗り越えて、以前の貧しさを解決することができた訳である。その農協づくり、及び農村づくりの裏には、「祖父—父—後継者」の代々に持っていた「生業観」「生活観」があり、それらが生み出したのである。社会全体の変化やあらゆる農業事情の変動の諸影響を受けていた地域社会の開発プロセスは、また農民の生業—生活過程に激しい変化をもたらしたのである。

士幌農民の場合は、「農協づくり」を行なってきたと同時に「農村づくり」努力してきている。しかし、そういった過程にはある程度まで農協自体が大きくなって、例えば開運部落の変化にまで影響を及ぼしたのである。その部落では、農民の戸数が減っていると共に部落内の共同体や隣の農家との付き合いが無くなっている。残っている農家は規模拡大、生産向上、品質向上、家族の重労働、個人的機械所有、等の生産様式に変わった。ついで、農民は農政に対する考え方を批判している場面が出てくるが、士幌のように、政治的革新とはまだ言いがたい。むしろ、彼等は政治的保守をとって社会的革新を進めていると思う。後継者の代で見れば、既に家族の生業—生活過程が農協の「傘」の下に入ってしまった父の代から、何らかの形で個人的経営や経営者的小集団を持って、農協と関係しない自分たちの農事研究会、研修会、等を作るような動きはある。しかし、まだ農産物の販売関係については、農協と手を組まなければならない。さらに、家族の生業—生活を企業的農協に強制される不安を意識しているので、将来に対して後継者達は様々な形で対応策を展開させていくであろう。

5. 2 後継者の教育過程と代々に伝える農民の質

家族の生業—生活について農民は、代々に伝わってきた農業のやり方によって農業計画を成り立たせたのである。伝統農民である祖父の代とそれ以前は、自然の厳しさに耐えた上で農作業に対して人間の力をかけていた。「ひたすらの働きものであれば収穫を取れる」と言う。そして農業そのものは「生業」のために行なわれたのである。つまり、家族を養うためであって、それ以上の目的は余りなかった。従って、家内の生活面では「父」が中心となって、全ての判断と決心に関しては「家父長制度」のように行なっていた。家事分担や男女の関係に対しても、はっき

りした形であった。そして、後継ぎの人にはそのような家族制度を身につけている他、農作業については親の背中をみながら「見覚えさせる」、「手伝わせる」といった、直接には父と子の接触期間が多かった。また、当時の社会的環境でも、隣の農家と共同作業以外には、農民の組織がなかった。父親は子供に対して、土地や家族の農業を続けて守ることが最大の期待であった。

昭和初期から父親の代に入って、不順な天候がもたらした冷害・凶作の影響で農業に大きな被害が当たった。貧しい生活を送っていた農家は「勤勉と節約」で、一生懸命に畑を切り開いて働いていた。それを改善しようと考えていた人達は、士幌村の農業会を創り、戦後は士幌農業協同組合を設立して、イギリスのロッチデール組合の原則で方針を立てようとした。それは、組合の一人一人の力を合わせての共同事業や農民の生活の平等を意図し、供給肥料、種、補助金等を助けていた。農民の間に、相互行為、共同、協力といった知識が地域内や家族の中でも伝えられた。士幌農民は皆の団結で士幌の農協づくりに努めていた。

ところで、昭和30年代後半以降に、日本の経済成長が進んだ段階で、地域農村社会に様々な転換や問題が起きた。農業転換期に伴って家族の困難にまで影響が及んだのである。当時の状況といえ、離農しながった家族では農業の経営内容を変えて、「畑作」一本から「畑酪」といった混合農業を試みていた。そういった中で、家族には父親と後継者ともに知識や技術改善が必要になった。さらに、借金の負担や生産拡大を目標として家族が重労働で働く事となった。それを改善するために機械化が進んでいる。しかし、家族農業経営を成り立たせる時に、農民は自分の力だけでは間に合わないで、資金、土地基盤、機械の設備等に関して、色々な手段で技術や経験が必要となったし、マスターしなければならなかった。この段階で見ると、父親が後継者に期待するのは「安定できる」経営の他に、そのような知識や経験をマスターすることであった。

昭和50年代に入って、後継者が代替りを始めた。前の代で創出された地域経済基盤、及び農業生産基盤を土台にして、後継者はもっと努力を重ねて、生産向上と品質向上に向かって一段と高く経営技術や知識革新を推進している。さらに、国内外の知識、情報交流、交換活動までそれを幅広く行なっている。農業教育の面では家族農業をしながら地域の農業高校で機械技術、科学的分析、実習事業、集団活動等の各分野を獲得することが、家族の経営や地域の農業開発計画にとって欠かせない教育内容となった。一方で、父親の代から基盤を創っていた農協が、かなりその運営と方針を変化させて、企業的な農協の姿に変わった。ある程度、士幌農協の事業拡大が進んだための変化で、地域の生産量が増え、技術や機械を段々と導入してきた。後継者自身はこの段階になってから、経営主として、家族の農業を経営している。彼等は経済的・生活的改善をする以外に、農業情報や教育改革をまだつづける。農政関心については、後継者が前の代より自分の意見や批判をはっきり出している。社会変化や農業事情の変動に対して、農業競争に対応できるような形で頑張っている。しかし、彼等は子供に農業の後継ぎになることを強制しないで、子供自身の能力、興味、要求等によって将来を考えていくと意識している。

(6) 地域開発プロセスの2側面

以上の分析のように、後継者の教育プロセスが形成されたのは、一つは家族の生業—生活過程、及び地域社会についている農業や開発の「見通し」に係っているのである。もう一つは、それについて「限界」があるということである。つまり、地域の開発計画を立てた時に地域内に持っている諸特徴を見いだすことが必要である。その次は、地域に暮らしている人々は何の程度までそれを理解しているか、そして、社会の変化に対して皆がどんな対応策を打ち出すのかが重要な関

わりとなると考えられる。

農村社会はどういう風に変わっていくのか、農民の暮らしはどう展開していくのかは、まずそこに住んでいる人々が自分たちで考えなければならない。我々の社会全体がまた変化しつつあるから、社会的変化及びそれぞれの開発進歩のなかに、地域社会がなくてはならないであろう。士幌地域のように、農民の家族生業—生活過程自体がまた変って、彼等の後継ぎになる地域の将来のためにも、そのような農業後継者育成プロセスが変っていくと考えられる。

地域開発計画とその発展段階で、実際に人々の暮らし向きが彼等の期待しているのと同様に発展されていくかどうか、まだ問題が残っている。何れにしても後継者の教育について、その農業技術や経営学等という「知識革新」は学校、またあらゆる機関で学ぶことができる。しかし、その反面に社会的な分野を獲得することはそういった機関だけでは充分に獲得することができないであろう。このような場合、人々の「生活改善」を推進する時には、そういった教育の分野を、「家族」及び「地域社会」にある社会的文化的政治的環境から学んでいくしかないのである。